

仕事に生かすならこの1冊

# 世界大不況の正体

評者 岡部 弘 デンソー相談役

現在の世界を覆う100年に1度と言われる大不況。なぜこのような大不況が急速に広がったのか、なぜ急激な悪化を食い止められなかったのか、誰しも疑問に思っているに違いない。こうした疑問に適切な回答が得られない限り、これからの世界経済がどうなるのか、どのような対策を取ればよいのか、判断できないのではないのか。

米国の住宅バブルの崩壊、とりわけサブプライムローン(信用力の低い個人向け住宅融資)問題が引き金となり、名門投資銀行であった米リーマン・ブラザーズの倒産が拍車をかけたというのが大筋での理解であろうが、これだけでは何か釈然としない。こうした疑問を晴らし、この世界大不況の正体を解き明かしてくれるのが本書である。

著者のポール・クルーグマン氏は米

国を代表する経済学者。昨年のノーベル賞受賞後初の出版物である本書は、難解な経済理論及び経済現象を分かりやすく解き明かしている。

著者によると、今回の危機は未曾有のものではなく、かつて世界が経験したものだ。1990年代に勃発した中南米やアジアの通貨危機。日本のバブル経済の崩壊など、そのすべてが今回の危機の序章であり、それらが一挙に押し寄せてきたのが正体だという。

問題は、こうした過去の危機について、本質的な研究を怠ってきたことだ。「これは全世界へ向けられた予言であり、どのような経済大国にも起こり得る」という著者の強い警告にもかかわらずである。

結果として予言は当たってしまった。それではこれからどうすればよいの

か。問題の根源にある金融のグローバル化は、人々が考えているよりはるかに危険な領域に入っている。そして米国政府が実施しようとしている経済対策(総額7000億ドル)では全く不十分だという。打つべき手は、思い切った資本の注入と本腰を入れた景気刺激策の実行である。こうした施策が適切に行われぬ限り、立ち直りは難しいというのが著者の考えだ。

最近では、景気の底打ち感が強まり、先行き見通しも明るさを取り戻しつつある。もちろん景気が回復に向かうのは望ましいことだが、目先の現象にとらわれ一喜一憂するのもよくない。

物事の本質を理解し考えることは常に大切である。その意味で本書は示唆に富んだ経済書であり、経済人にとって必携の書と言えらるだろう。



## 『世界大不況からの脱出』

ポール・クルーグマン著  
早川書房  
1500円(税抜き)  
ISBN978-4-15-209017-1

### 新刊紹介



『ワーク・モチベーション』  
ゲイリー・レイサム著  
NTT出版  
3200円(税抜き)  
ISBN978-4-7571-2199-7

「やる気」はどのように生まれるか、研究の歴史を概観し諸理論を整理する。金銭、目標、業績などが議論されてきたほか、近年は認知や情緒との関係が調査されている。骨太な学術書だが、実践的なビジネス書としても有用。



『商売復興計画』  
川出圭司著  
商業界  
1429円(税抜き)  
ISBN978-4-7855-0353-6

大阪・船場の問屋街で、バイヤーや通信販売事業など計30年以上務めた氏による、商売再構築のための発想転換ヒント集。36の視点はどれも基本的なことばかりだからこそ、実行は難しい。読み手の度量が試される一冊。



『松下幸之助は生きている』  
岩谷英昭著  
新潮新書  
680円(税抜き)  
ISBN978-4-10-610317-9

前米国松下電器会長の著者が綴る経営論。創業者の著書や発言を頼りに米国事業を拡大させた軌跡をたどる。顧客、社員など人を大切に、取引先との共存共栄を図る。「幸之助の分身」としてその精神を貫いたと振り返る。